治ス。故ニ此ノ治方ハ理ヲ明カシ暁シテ之ヲ治ス」と、心理療法を重視していることも注目すべきである。

（東京）

江戸時代、東北地方鉱山の煙毒（塵肺）

三浦豊彦

江戸時代の東北地方には数多くの鉱山が存在し、多数の坑夫（金掘大工）が働いていた。こうした集団のなかに特徴のある病気が多発すれば、これに注目することになる。

烟毒とか、烟食い、烟、とかいわれたのは現在の塵肺で、この職業病で体がよわった有様から「よろけ」「掘だおれ」「疲れ大工」（大工　金掘坑夫）などともよんだ。

尾去沢の南西にあたるところに大葛金山があった。佐竹氏秋田着任以前からの金山で藩営の時期もあったが、寛政以来民営であった。

江戸後期の国学者、文人、歌人、紀行家、民俗学者でもあった菅江真澄〔宝暦四（一七五四）～文政一二（一八二九）〕が享和三年（一八〇三）五月に大葛金山を訪問している。真澄は鉱山師ではなかったが、彼の遊覧記にはしばしば鉱

山があらわれる。彼は鉱物の知識をもっていたが、いわゆる山師ではなく、また採鉱の技術を調べているのでもなかったようである。物産というより、それを扱う人間との接触面に興味をもっていた。こうして享和三年（一八〇三）の正月から五月までの紀行が「秀酒企及温濤（すすきのいでゆ）」であって、五月五日に大葛金山の台所（金吹所　精錬所）でとまっている。そしてこの日のおわりに烟毒の悲惨なありさまを書き残している。

「わきてここのこがね山は、こと山とことなるふり多し、いつらの山にても、かなほりの工となる身は、烟てふ病して齢みじかく、四十と世にふるものはまれなり、くにのならひとて、四十二のとし厄を挙りて祝ふは、とめるも、とほしきも、なそへなうすれば　かなほりの家にては男の三十二と齢のつもれば、よそちふたつのとし祝ひのころして、年賀しけるとなん、さりければ　誰れも女は若して男にをくれ、身の老ぬるまでは、七たり、八たりの夫をもたるが多しと、声のみて話りけるに、なみたおちたり」

つまり、この大葛金山では「烟てふ病」で男が若死するので、普通は四十二歳で厄年を祝うのに大葛では三十二歳になると四十二歳と同じ心で祝っている。男が次つぎ若死するので、一生の間に七人、八人の夫をもった女達がいると書き残したのである。

アグリコラ（G.Agricola 1494～1555）はその著書「デ・レ・メタリカ（De Re Metallica, 1556）」のなかでカルパチアの鉱山には肺癆で次々倒れた夫を七人ももったという婦人たちがいると書いている。

菅江真澄とアグリコラと時代はことなるが鉱山の職業病で男が若死するので一生の間に七人、八人の夫を持った女達がいると記録を残したのである。

真澄は文政十二年（一八二九）病を得て、角館で没した。墓は秋田市寺内町の金良寺の近くにある。享年は数え年で七十六、七と刻んである。

この大葛金山の文化年間にかかれた「金掘病体書」の発見されたのは昭和十四年（一九三九）のことである。江戸医学館あてだったという。

この病体書では金掘が労働の際の劇しい呼吸につれて吸い込む「烟の如き石粉」が病の原因としている。しかし金

掘同様に坑内にいても石粉を吸い込まなければ老年まで病がない。次に今からみても適確な塵肺の症状が書かれている。二十六、七歳のころから「けそけそと咳致し石粉交りの痰を吐く」、そしてだんだん弱って咳が強く、胸がいたみ喘息のようになり「痰を強く吐候時に鰒(はたはた)のささめの如きものを吐申候」、日々痩せおとろえ、こんな時に医師が薬を用いても一こう効はない。病になるとすぐ坑内労働をやめた者で、二、三年たって石粉まじりの黒い痰をはくものがある。これまで医師は対症療法をやっているだけで根元の治療をする医者がいない。礦石と礦石から出た丹礬のようなものを巻上げるので、この毒を防ぐ神薬を教示してほしいと書いている。筆者の荒谷忠兵衛は医師とされていたが実は山主だった。なおこの金山は文政九年（一八二六）十月、金掘の辰五郎を江戸医学館に送り、診断を受けさせたという。

天保十三年（一八四二）六月、幕府の勘定奉行井上備前守栄信から、生野銀山の代官に対して煙毒予防についての御沙汰があった、その内容は、梅干を坑内に入る時に口にふくませ、出坑の時濁酒を一ぱいのませると煙気をはらうから、梅の木を植えるようにという内容で、早速、代官所の指示で、山師、町役人、買吹（精錬者）をよび、趣旨を説明したと記録が残っている。

勘定奉行はこの方法は奥羽金銀山で行なわれていると伝えているが、奥羽の金銀山にこうした記録が残っていたら教示を得たい。

（労働科学研究所）